



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 地球 1936, 26(6): 470-476

ISSUE DATE:

1936-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184628>

RIGHT:

大阪營林局長三宅發士郎氏の監督の下に出来たこの調査書は近畿、飛騨、北陸、山陽、山陰各方面の被害と颱風の進行とを概論し、各府縣下の森林被害を更らに局部的に詳述したものである。地況及林況と風水害、最後に颱風と森林の施業とのべ寫眞や圖解ことに鮮明を極めてゐて一讀當時を追想し再讀風水害の對策に所せしむるものであり附録に昭和九年風水害關係文書がのせてある、我等は本書によつて教へられる所が多いと共に營林局執筆の各位に深甚なる感謝をさへげる。

(藤田)

○京都市都市計劃基本圖

三千分一 京都市役所藏版
寫入 二十八回

三千萬分一京都市實測圖がさきに京都市で出来たのを今度小野三正氏の手で増補改版した、それが一部日本地圖協會の手で發賣されてゐる。今日までに出来た京都の地圖でこれ程詳密正確なものはない、従つて京都市の過去の歴史と將來の發展とをこの一枚に網羅し得たといつて過言ではない。六大都市の何所にもまだかやうな基本圖がかゝる安價で發賣される迄には事業が進捗してゐない際に、我京都市が敢然として萬金を投じてこれをやり上げた所に誇があり、さうして又これを安價で一般の人に賣り出すことをゆるした點に於ても文化事業の一として敬服に堪えないと思ふ。丸善か、小林川流堂などへ申こめば手に入るであらう。(藤田)

雜報

○赤峰の甘草

甘草は阿片及毛皮類と共に東部内蒙古の特産物として有名である、赤峰縣や建平縣がその中心で興安西省は土地遠隔で交通不便のため之を放置しておくやうな狀況であつたが、昭和十一年度から興安省各旗と赤峰の滿蒙興業株式會社支店との契約で旗で採取しはじめることになつた。

甘草採取はその地に於ける蒙漢人の唯一の生業であるが、栽培植物ではない、野生のものをとる年額凡そ四百萬斤すべて赤峰に集まる、三月から六月までの農閑期に採取し、砂地産は黄色にして甘味多く粗大で藥用に供し、壤土地のものゝはやゝ黒く苦味があるがエキス分が多いので之をエキスにつくる、シラムリン河一帯の産が良い。

現在ではたゞ無茶に引きぬき細根を残さないからいかに無盡藏といつても追々と産出が減る傾向である、今日に於て之を栽培するとか輪堀する方法を講じなくてはならぬ。

○メキシコ事情

メキシコは世界で最も鑛産にとむ國の一である、銀は第一、全世界産額の約半分、鉛は第二位、金は第五位、銅は第六位、亜鉛は第九位、石油以外で鑛物産出一億六千萬ペソ、石油は世界第七位であるが其油田六萬ヘクタール、一九三三年には五百四十萬立方メートル九千六十万ペソにすぎなかつたけれども、一九二一年には三千萬立方メ

トル以上を産出した歴史がある。しかしメキシコの實際は農業國で人口の七割までは農牧に従事し、土地廣大にして且肥沃であり熱帯と溫帯の産物が出来るので單一性農業の危險がない。たゞ輸出品が鐵産が多いので鐵業國の如くに見えるのである。家畜では人口三人當二頭で、總數千八百萬頭以上山羊、豚、羊。これにつぐ林業も各地に處女林が多く製紙製材の小工業も起りつゝある。沿岸の魚類も亦豊富で近年多量の冷凍海老が日本に入つてくる位である。(但しこの海老はロサンゼルスからの輸出といふ形式になつてゐる)

ディアズが獨立政權を掌握して以來一九一〇年迄の間に各方面の政治が進歩しラテンアメリカ第一の工業國になつた。その後一九二一年迄動亂時代には國勢一時不振になつたが、近頃いよゝ回復の勢が目に見えてきた。貿易は常に輸出超過國である。主として米國との取引が多い。即ち輸出入額の五〇%までは米國で獨逸、英國、佛國、スペイン等これにつぐ。今この國の經濟資源をみると第一農業は二十九億ペソの資本を投下し玉蜀黍、苜蓿、甘蔗、隱元豆、珈琲、ヘネケン(サイザル麻)等を産出、各種野菜、穀物、果實がつくられ、苺、ヒカマ、レモン、桃、マルメロ、梨、葡萄、西瓜、パイナツプル等の輸出がある。

棉花も將來農業上發達の餘地がある、ラゲネラが主要産地であるけれども將來太平洋岸に作られるならば日本へも輸出が容易になるであらう。玉蜀黍は土人の主要食で石灰と共に

蒸して後之を煉つぶし煎餅の如き形にして焼いて食べてゐる。唐辛と肉と豆などを中に包込み所謂メキシコ饅頭が喜ばれる。パンの代用として煎餅のまゝ用ひるのもある。甘蔗からは精糖、アルコール、黒砂糖塊の三種類が出来る。

蒜は殆どすべての食物を醃漬油又は豚油であげて食ふラテン民族にとりての油の毒消として用ひられる生活の必需品で、世界では伊太利、西班牙、智利の三國を主産國とするがメキシコでも年産額三千噸をこえ輸出力がある。唐辛は熱帯民族一般の嗜好で、メキシコ人は生の儘食事に混じ、ソースにつくる年額一萬七千噸を越え海外に輸出する。胡麻も優良であり、隱元豆はフリホールといひ、茹で、豚の油でいためて食ふ主要食品である。

ゴムは古く野生木からとつたが、目下栽培されて五萬八千六百ヘクタールに上る、米國資本である。但しゴムの價格下落で全く衰微したが將來は馬來ゴムの一敵國となる見込である。

鯨嚙用ゴムとして知らるゝゴムはチーコ・サボラといふ木の皮を切りひらいて出る乳狀液から採るのであるが、その木はユカタン半島の地質に適し十月から三月までの間にとり、國有地のみでも約五百萬ヘクタールのチーコ樹林があつてチューイング・ガムの原料として輸出される。

工業國としてのメキシコは未だ繁盛ではないから紡績なども自給の域に達しない。しかし人絹工業と共に近頃盛大にな

つたから本邦人組の輸出先として見込がある。セメント、鐵板、自動車及部分品、ラヂオ機なども輸入し得られるであらう。最近本邦製染料の眞價が見とめられてきた。貝鈕釦、鉛筆、文房具、セルロイド製品、陶磁器、電球、計算器、フェルト帽子、硝子板などそれそれ輸入可能の品目であるといはれる。

我國としては墨國から輸入をうべき多くの礦産や棉花等がある。従來政争の多い國として注目されなかつた墨國も太平洋をへだてた近い隣國であるから將來は大に對墨貿易を發展しなくてはならぬ。恰もこの國はラテンアメリカへの中繼地でもあるからである。

○白領「パノー」への通路

日本商品が英領東阿へ入るのは極めて簡單で、ケニヤ、ウガンダへはモンバサ港、タンガニイカへはダレサラム港を通過する。然しコンゴへはしかく簡單ではなく地方的に違ふ。英領スーダンに接するスタンレーヴィル州向日本品の通路はポートスダン經由、モンバサ經由、西阿マタデイ經由の三路が考へられ南ローデシア及葡領西阿に近いカタンガ地方面には葡領東阿のベイヤ經由、葡領西阿のロビト經由が考へられ其他は大抵マタデイ經由である。かく地方的に異なる理由はコンゴ河が隨處に急流瀑布を有し航行を阻害し、たとへ可航水路でも水草繁茂して夜間の航行が出来ない所があり、河口から遠く隔つた土地では他國の運輸系統による方が便利であるからである。

(1) モンバサ經由、本邦船からモンバサに陸揚された品物はケニヤ、ウガンダ鐵道でムアラモチに至り、同所から支線でキオガ湖畔のナマサガリに達し船にのせて同湖、ポートマシンデイにゆき、今度は自動車でアルバート湖のプチアバに達し船にて對岸の白領コンゴのカセニイ又はマハギに達し、所要日数はモンバサからカセニイ間七日、二週一回の定期運行がある。從つて神戸とモンバサ間二十六日を加へると三十三日乃至四十七日、運賃は高率で綿布一噸が神戸、モンバサ間三十一圓五十錢、モンバサ、カセニイ間六百五十三志五十九仙である。

(2) ポートスダン經由、本通路はポートスダン港を上つてスダン鐵道でカルツームに達し、それから同鐵道經營の河船でナイル河を溯航しジュバに、ジュバから自動車で公果領アバに入る。それから自動車で各地にゆく、ポートスダンからカルツームまで二日、カルツームとアバ十三日、所要日數十六日、本邦からポートスダン迄三十日、全體で四十六日以上。

(3) マタデイ經由、本邦品はアントワープ接續が普通でアントワープからマタデイに陸揚された荷物はコンゴ鐵道でレオポルドヴィルに、それから川船でスタンレーヴィルに達しそれから自動車となる。日本アントワープ間五十日、アントワープからマタデイ間十九日、スタンレーヴィルまで十四日、即ち八十三日乃至九十七日、スタンレーヴィル州の消費地はキロモト金坑及びウエレ棉作地である。最初は英領東阿

から入つたが、白耳義がベルガの四割切下げを行ふに至つて鐵道運賃は四割上つた勘定となるので、今迄ケニヤウガンダ鐵道で入つて行つた荷物が近頃はアントワープへ大廻りして入るやうになつた。さうしてこれは白國政府の政策であるから、將來は邦品もマタデイ經由を利とするやうになるであらう。そこで大阪商船ケープタウン經由も考へられるし、別に大阪商船西阿航路(所要日數二ヶ月、運賃棉布一噸五十四圓)も出来てきた。しかし二、三ヶ月一回の船だからやはりアントワープ經由の方が有利となるであらう。

○世界羊毛生産國 輸出可能の羊毛生産國は濠洲、ニュージーランド、南阿聯邦、アルゼンチン及びウルグアイの五ヶ國にすぎない。一九三〇年から一九三三年四ヶ年の平均をみると、

	生産高	百分比
濠洲	三、〇二二、〇〇〇俵	四九、〇
ニュージーランド	七六八、〇〇〇	一三、〇
南阿	八三八、〇〇〇	一四、〇
アルゼンチン	一、一二一、〇〇〇	一八、〇
ウルグアイ	三九一、〇〇〇	六、〇
計	六、二四三、〇〇〇	一〇〇、〇

どうしても濠洲が第一位で濠洲は平均十五億五千萬圓を輸出し、我國へは千二百四十九萬磅、一割四分を輸出し、我國からは五百二十四萬八千磅を輸入してゐたから、換算して平均

一億五千萬圓の入超であつた。日本はそこでこの片貿易を是正せんとした。

新西蘭では本邦へ輸入羊毛の二分九厘平均二萬一千四百俵四百九十萬圓を輸入し日本品六百八十萬圓を輸出してゐたが羊毛以外のものを合せて八百八十萬圓位になるから約百九十九萬圓は日本の出超である。南阿に關しては日尙濠く羊毛の輸入一分八厘にすぎない。日本向五百四十二萬圓に對し、日本から二千九百六十萬圓を出すのだから、日本の受取が二千四百萬圓も多い。故にこゝでは少し羊毛を買付けねばならない。アルゼンチンも本邦へ羊毛の輸入額僅に二分である。

日本から平均二千三十九萬圓に對し羊毛其他千百七十四萬圓で八百五十四萬圓程出超となるから、こゝでも買進めなくてはならぬ。ウルグアイも亦日尙ほ濠く本邦へ輸入額の五厘五毛しか羊毛を買つてゐない。一年五百萬圓位は輸出し二百四十八萬圓位しか買つてゐない。羊毛産出國と日本との貿易は日本への輸入は獨り羊毛のみではないけれども、對濠問題の上から考へて、羊毛輸入の一國依存を止める點からみて、相當考慮すべきであらう。

○オランダの馬鈴薯 オランダ全國十一州中馬鈴薯の栽培されぬ所はない。北部諸州に最適であり和蘭國民の主要食料として普通の家庭ではパンに匹敵する常食であり、澱粉製造、糖蜜製造、糊精製造の原料としても有である。直接食料四、工業用一といふ割合であるが其作付反別は

ライ麥	一九二、〇〇〇	（ヘクタール）	小麥	五七、〇〇〇	（ヘクタール）
馬鈴薯	一六〇、〇〇〇		燕麥	一〇九、〇〇〇	
大麥	三〇、〇〇〇		甜菜	五七、〇〇〇	
亞麻	一五、〇〇〇				

寒國だから、日本などは比較にならぬ。東北、北海道あたりの農作ぶりである。土地低濕で、小麥はつくれないから一八七〇—一八〇年代に蘭國の農家は小麥栽培を放擲して、爭つて有利な馬鈴薯栽培に轉向した。が以來國民の常食となつた。そこで政府は馬鈴薯疫病の豫防並撲滅をはかり、地質改良として集約農法灌漑施設を改良した外、栽培器具を改良した。同時に農民の補習教育を盛んにした効果で一八九〇年代の馬鈴薯の一ヘクター平均收量二三九蒲になつた。これは一八七〇年代の一ヘクター當り收獲一二五蒲に比して同一面積の收穫が倍加した實例である。

しかし最近農業不況の對策として栽培制限をやつた結果一年十萬ヘクタール以上をつくらぬやうになつた。それは食用薯栽培者が澱粉用粉に轉向して澱粉業者を苦める傾向が見えたからであつた。

主なる栽培品種は Clay-potatoes, Peat-Soil potatoes, Sand potatoes 即ち粘土、壤土、砂土各々適種があり食用品種は粘土地につくられ、澱粉用は砂質地につくる。澱粉用では Thorbeck, Triumph が良種である。フリースランド州の

Triesehe Kleipotaters は栽培種用として外國へも多數輸出されてゐる。集約農法の我國などもかうした注意は自今益々必要となるであらう。

○文部省高等教員檢定試驗地理科問題

昭和十一年十一月文部省に於て高等教員檢定試驗を施行せられ其内地理科は十日より十三日まで四日間左の通り出題ありたり。

第一日 地理地理

1. 地球上の自然地域を主として氣候に基きて區分せよ
2. 最近の湖沼分類法
3. グリーンランドの構造及地形
4. 噴出物による火山地形の差異

第二日午前 人文地理

1. 航空路に及ぼす地文學的條件
2. 滿蒙及支那本部諸族の人類學的特徵
3. 人口分布を表現する諸圖法の長短如何

第二日午後 地理學史

1. トレミーとストラボン
2. 中世アラビアの地理學
3. メルカトルの事業
4. ベンクの事業

同 數理地理

1. 甲乙二點間の大圓航路の長さを(a)地球儀上に測る便法及び(b)經度及緯度により計算する方法

の發見 (Precession of equinoxes)

第三回 國文部誌

(Semple, E. C. : Influences of Geographic

Environment, 1911, p. 12-14)

These complex geographic influences cannot be analyzed and their strength estimated except from the standpoint of evolution. That is one reason these half-baked geographic principles rest heavy on our mental digestion. They have been formulated without reference to the all-important fact that the geographical relations of man, like his social and political organization, are subject to the law of development.

.....

Owing to the evolution of geographic relations, the physical environment favorable to one stage of development may be adverse to another, and *vice versa*. For instance, a small, isolated and protected habitat, like that of Egypt, Phenicia, Crete and Greece, encourages the birth and precocious growth of civilization; but later it may cramp progress, and lend the stamp of arrested development to a people who were once the model for all their little world. Open and wind-swept Russia, lacking these small,

warm nurseries where Nature could cuddle her children, has bred upon its boundless plains a massive, untutored, homogeneous folk, fed upon the crumbs of culture that have fallen from the richer tables of Europe. But that item of area is a variable quantity in the equation. It changes its character at a higher stage of cultural development. Consequently, when the Muscovite people, instructed by the example of western Europe, shall have grown up intellectually, economically and politically to their big territory, its area will become a great national asset. Russia will come into its own, heir to a long-withheld inheritance. Many of its previous geographic disadvantages will vanish, like the diseases of childhood, while its massive size will dwarf many previous advantages of its European neighbours.

This evolution of geographic relations applies not only to the local environment, but also to the wider world relations of a people.....

The period of maritime discoveries in the fifteenth and sixteenth centuries shifted the foci of the world relations of European states from enclosed seas to the rim of the Atlantic.....

